Bread Givers に見るユダヤ人女性
― 娘として，妻として，人間として ―

田　中　真　夕　美

はじめに

Anzia Yezierska は1885年ごろ，ロシア・ポーランド帝国の Pinsk と呼ばれるユダヤ人移住地シュテトルに９人兄弟の一人として生まれた。1901年にアメリカ合衆国に家族と共に移住する。父はタルムード[1]の学者であったため，他の学者たちの妻の例に漏れず，Anziaの母親が地元の市場で些細な物を売り，そこから稼いだ金で生活をするという非常に貧しい家計であった。

アメリカに渡って来た一家はニューヨークのロウアー・イースト・サイドのユダヤ人街に住み始めた。17歳の時，父の反対にあいながらも，家を飛び出し，スウェットショップ[2]やランドリーで仕事をしながら学校に通った。1915年に彼女は自分が育った世界の人々を描いた短編を出版し始めた。そして1920年に初めての短編集 *Hungry Hearts* を出版するに至る。この短編集は２年後の1922年，ハリウッド映画となり，Anzia に富と名声をもたらすこととなる。その後も精力的に作品を発表するが，1940年代になると大衆の流行から取り残され，貧困のうちに1970年に88歳でこの世を去った。

Anzia の作品に共通することは，どれもほとんどが半自伝的な作品であるという点である。どの作品も，力強く生き生きとした描写で20世紀初頭のユダヤ人移民の生活を私たちに伝えている。その中でも最も力強く私たちに当時の生活を鮮明によみがえらせる作品が1925年に出版された *Bread Givers* である。この作品で Anzia は主人公である Sarah を通して読者に20世紀初頭のユダヤ人移民の娘の一生を伝える。タルムードの学者を父に持つ家族がどんなに大変な生活をしていたのか，そしてその状況からいかにしてアメリカという社会へ旅立ったのかが描かれている。この論文では，この作品 *Bread Givers* を中心に，20世紀初頭にアメリカ，特にニューヨークに渡って来たユダヤ系移民の女性たちが，ユダヤ教を重んじる父親を中心に成り立つ家族の中の娘として，妻として，そして，社会に出た後の一人の人間としてどのように生きたのかを見ていきたいと思う。

1. ロウアー・イーストサイドでの生活環境

Bread Givers を見る前にまず，当時のユダヤ人移民を取り巻く環境を大まかにまとめてみたいと思う。歴史上，アメリカにやってきたユダヤ人移民には３つの大きな波があった。最大かつ，最も重要なのが，第三波である東欧からのユダヤ人である。時期としては1880年代から，1920年代までとなる。祖国に見切りをつけて，より良い環境を目指してアメリカにやってきた先駆者た

ちとは違い，彼らは何世紀にもわたる迫害から逃げてきた，戻る場所のない人々だった。1881年から1921年までの40年間で300万人以上の東欧ユダヤ人がアメリカにやって来た。彼らの特徴は，ドイツ系ユダヤ人などと比較すると，貧しいことが多かった。宗教的にはオーソドックスと呼ばれ，厳格にユダヤ教の教えを守る宗派が多く，言葉もイディッシュであったため，環境への適応が非常に困難だった。(3) 彼らの多くは東海岸一帯の都市部の貧しい地域，特にマンハッタンやボストンなどに密集して住むことが多かった。特にロシアから来たユダヤ人の6人中5人が都市部に住んでいた。(4) ニューヨークに関して言えば，1900年までの市の人口の76%が外国生まれ及びその人たちの子供であった。1910年にはロシア生まれのユダヤ人の人口がドイツ生まれのユダヤ人の人口を勝った。(5) 1920年までにニューヨークには48万人のユダヤ人が住んでいたと言われている。

この時代の移民たちにとっての東欧からアメリカへの移動で3つの大きな変化は①慣れ親しんだ小さな街から大都市への肉体的移動，②ユダヤ人の伝統的なモラル価値や文化からの決別，③彼らが存在した社会的階級の急激な変化つまり，無産階級への移行，であった。特に，1900年以降の移民の場合，一度祖国で大都市生活を経験している場合が多かったが，それ以前の移民は，祖国の小さなシュテトルから，そのままアメリカに直接来る場合が多かったため，本当に急激な変化だったと言えよう。この事実に追い討ちをかけるのが，当時のアメリカの社会状態である。この時代はちょうど革新主義時代と言われる頃だった。正式には革新主義時代は1900年から1918年ということになっている。この時代について Ruth Rosen が非常に的確な説明をしているので，次に要約しておきたい。この時代を人は通常，「矛盾とコンフリクトの時代」と呼ぶ。市場は生産者中心主義から，消費者中心主義へと，急激に移行を始め，一つ一つ生産者の都合に合わせて丹念に作られるものよりも，異常な速度で増える消費者のニーズに合うように大量に生産されるものが人々の間に出回るようになった。そして，産業化と資本主義化の最大の産物は，全てが金と交換可能になったことである。全てのものは，金と交換することになり，ヨーロッパでしばしば行われていたような物々交換は存在しなくなった。「アメリカで価値のある唯一のものは全能の金である」ということわざが示すように，アメリカでは伝統，宗教，学問などより，まずは目の前の金銭問題をどうするか，日々の生活を送っていくのに絶対に必要な金をどうするかという問題に直面することになるのである。このような時代が東欧ユダヤ人がアメリカで生きた時代であった。アメリカ人にとっても，新しく進出してきた価値であっただろうこの時代の環境で，移民たちがさらに困難な日々を送ったのは容易に想像できるであろう。(6)

そのような社会で，移民たちはロウアー・イースト・サイドの中で自分たちのエスニックごとに固まって，コミュニティを作り，生活した。アメリカでのユダヤ人移民の生活を特徴付けるのがテネメントの存在であろう。1893年にはニューヨーク市の人口の半分がテネメントに住んでいた。特に有名だったのが，1878年に James E. Ware が考案した悪名高きダンベルテネメントである。これらの建物はだいたい4階建てから6階建てで，できるだけ狭い敷地で，できるだけ多く部屋を作り，できるだけ多くの人々を詰め込んで住んでもらおうという設計だった。1905年の国勢調査によると，ロウアー・イースト・サイドのチェリーストリートにあるテネメントには675人が詰めこまれながら生活していた。平均的アパートメントはベッドルーム，キッチン，パーラーと言う3つの部屋から成っていたが，夜にはガスや電気を節約するために，多くの人がキッ

チンですごした。そこではアパート8つに対して1つの水道しかなかった。しかし，そんな水道でさえ，祖国では井戸から水を汲んでいた妻たちにとっては，素晴らしいものだった。ほとんどの部屋に窓はなく，窓があったとしても，見えるのは隣のテネメントのビルの壁だけで，日光が部屋の中にさすことはめったになかった。窓が少ないため，換気は大変悪かった。そのため，少しでも換気をよくしようと，人々は自分たちの部屋のドアを開けっ放しにすることが常であった。そのような状態ではプライバシーと言う言葉は全く存在しなかった。トイレは屋内にあったが，祖国ではトイレは屋外にあるのが普通だったため，移民たちは奇妙に感じた。 1893年の調べによると，ニューヨーク市の家族の47%しか，屋内にトイレを持っていなかった。しかし，この数字は人口の約半分が個人のトイレを持っていたと言うことではない。通常，4家族やそれ以上で1つのトイレを共有することが多かった。さらに風呂に関して言えば，通常は公共風呂なわけだが，1890年の時点でロウアー・イースト・サイドでは25万5千人の人口に対して306の風呂しかなかった。つまりそれは833人に1つのバスタブという割合になる。さらにユダヤ人女性は，宗教的義務として生理の後，ミスバスと呼ばれる特別な入浴の習慣があった。しかし，ロウアー・イースト・サイドのミスバスはテネメントの地下にあり，水も頻繁に変えられたわけではないので，非常に不衛生だった。(7)

2. ユダヤ移民の娘たち

Anzia Yezierska による *Bread Givers* は，厳格な父親の下で育った4人の娘たちの人生を末っ子の Sarah の視点から描いている。1番上の姉の Bessie は毎日タルムードを学ぶためにシナゴーグに通い続ける父親の代わりに，家族の稼ぎ手として工場で働き，さらに家事もこなす。2番目の Mashah は奔放でおしゃれにも興味があり，比較的上流階級の地域でメイドとして働いているが，家での仕事はほとんどしない。彼女は洋服や美しいものに非常に興味があり，時として給料を自分のおしゃれだけのために当てて，家族を動揺させる。3番目の姉である Fania も外で働いている。母はユダヤ人街の市場で物を売りさばいて，少しでも家計の足しにしようとしている。彼女たちの父親はタルムードの学者である。つまり，彼にとっての美徳はタルムードを学ぶことであり，彼にとっての日々の仕事はシナゴーグで神と対話をすることであった。アメリカに移ってきた時にもこの家族が持ってきた荷物は父親の本だけであった。そのような家庭の中で Sarah は当時10歳であるにも関わらず，台所でジャガイモの皮をむきながら "but from always it was heavy on my heart the worries for the house as if I was mother."(8) と思っている。基本的には長女の Bessie が工場からもらう賃金で生計を立てているのだが，その仕事も今はない。Sarah は家計を助けるためには，自分には何ができるのか日々考えていた。ある日，家族は次の食事の準備をする金さえ余っていないことに気づく。そこで Sarah は母親に自分に何かを売らせてお金を作らせて欲しいと頼み込む。そしてヘスター通り(9)に出ていって，ユダヤ人にとっての常食であったニシンを売るのだった。最後の1匹を売り終えた Sarah は "I counted my greasy fifty pennies. Twenty-five cents profit. Richer than Rockefeller, I felt."(10) と思うのだった。たった25セントの利益でも，こんなにも満足感を得ることができた理由は，値段ではなく，自分でお金を稼ぐことによって生じる自分の中の独立心であった。その証拠に上の3人の姉

たちが仕事を見つけた後にも，Sarah はニシンを路上で売り続けた。“Earning twenty-five and some times thirty to fifty cents a day made me feel independent, like a real person.”[11] と Sarah が言っているように，ただ家計を助けるためではなく，自分が独立した人間であると自己確認するためにニシンを売り続ける気持ちを露にしている。

それでは，実際の娘たちはどうだったのだろうか。実際のユダヤ人家庭の経済は家族経済と呼ばれる家族一丸となった労働で成り立っているものだった。Steven Mintz によれば家族経済のコンセプトは「全ての決定は，個人の選択ではなく家族のニーズに合わせて決められるということ」であり，19世紀の家族にこのコンセプトを当てはめれば，「全ての家族のメンバーが家族の物質的必要性に貢献する」ということになる。[12] 全てのユダヤ人家庭にとって，家族全体が生き延びることが，最優先事項であり，個人の幸せは後回しにされた。この家族経済の中では，子供たちによる労働も重要だった。多くの娘が14歳までには学校を辞めて，家庭で母の家事の手伝いをしたり，工場で働いたりするのが，当時の移民の家族では常識だった。時として，祖国では教育を受けていた子でさえ，アメリカでは家族を支えるために働くケースも見られた。祖国では祖母たちがやってくれた幼い子供たちの世話をアメリカでは年上の子供たちがした。なぜなら多くの場合，年配の祖父母世代は新しい環境に身をおく不安から，アメリカには移住せずに祖国に残ることが多かったからである。実際にユダヤ人移民の家族は，圧倒的に核家族であった。1905年のニューヨーク市のユダヤ人家庭の95%が核家族であった。[13] 思春期というコンセプトはアメリカ的な発想であり，移民の子たちにとって，子供時代のあとにくるのは，大人であった。[14] このように，子供による労働が家計の重要な一部となっていた場合，子供の数というのは非常に重要な問題だった。もし，子供が多ければ，それだけ働き手も多いということで，家族経済としての収入が増え，妻も下宿人を取る必要はなくなったが，子供が少ない場合や，子供がまだ働けるまでの年齢になってない場合は，妻は内職をしたり，下宿人をとる必要があった。また，男の子が働いた場合，たとえそれが，家計を助けるためだとしても，一人前とみなされ，多少の金は自由に使えたのに対して，多くの娘たちは，いくら働いても一人前とか自立した人間とはみなされなかった。その理由は一人前とみなすことや，自由な金をもつことで，自由を手に入れることにより，その自由さが，結婚に及ぼす影響を親が懸念してのことだった。この状況を考えると，Sarah がニシンを売ることによって，自分が独立していると感じたのは，自己満足の範囲であって，両親や他人からは必ずしも彼女の独立心は認められていなかったことが伺われる。給料は基本的には，封筒に封をしたまま，母に渡さなくてはいけないにも関わらず，娘たちが，自分のために使えない金を一生懸命稼いだ一番の理由は，母を助けたいという気持ちだった。働き口としては特にユダヤ人の娘たちにとって，衣服工場は最も人気ある就職先だった。当時全米の75%の衣服がニューヨーク市で作られており，それらを生産していた工場の労働者のうち56%がユダヤ人であり，そのうちの50%が20歳以下の人々だった。[15]

そのようなユダヤ人移民の娘たちにとって，恋愛や結婚とはどのようなものだったのだろうか。狭く全てにおいて，ルールがあった祖国とは異なり，アメリカという新しい地では，若い移民たちにとって，男女関係でも新しい可能性が広がった。依然として結婚を取り仕切る結婚仲介人は存在したし，親が連れてきた相手と結婚する娘たちも存在はしたが，少しずつではあるが自由な恋愛や自由な結婚という可能性がでてきて，選択肢が広がってきたのも事実であった。その自由

な結婚の前提として，より広い範囲での男女の付き合いがあった。その理由としてまず顕著だったのが，男女の出会いの場所が増えたことである。家の前のストリートは出会いの場となった。ロウアー・イースト・サイドの人々はテネメントの前のストリートを社交の場として利用した。特にこれと言ってすることなくとも，階段に座りこんで，友達との会話に花を咲かせ，情報の交換をした。さらに，友達や親類の結婚式も若い男と女が出会う絶好の機会であった。さらに，祖国と決定的に違ったのが職場での出会いである。祖国では，若い女が外の工場などで働くことはあまりなかったが，アメリカでは，多くの若い娘たちが工場で同僚の男性と共に働いた。職場には，親の監視の目がなく，ある意味，隔離された場所なので，比較的楽に恋愛が行われたようである。多くの娘たちが仕事を始めて何年かで結婚をし仕事を止めて家庭に入った。そのうちの多くが恋愛結婚だった。親も子供が行き遅れになるのを恐れたのか，恋愛結婚を許し始める傾向にあった。けれど全体としてはやはり，結婚に関しては相変わらず保守的で，自由な恋愛結婚をしたとしても同じ民族同士の結婚が望まれた。1900年ごろにはユダヤ人の99%がユダヤ人同士で結婚していた。[16] 結婚は，ただの感情的な人間同士の契約，という意味合いのほかに，社会的な意味合いもあった。女性にとっては，結婚は厳しい両親と辛い生活から逃げる最も確実で手早い手段だった。幸運な者は，本当のアメリカ人と結婚して法的にもアメリカ人になれた。そうでなくても，少しでも地位のいい人と結婚できればロウアー・イースト・サイドから逃げ出し，当時は中産階級の居住エリアであったハーレムなどに住むことができた。そのようなわけで，宗教的特権が重視された祖国とは違い，アメリカでは金持ちの男の方が学者よりも早く結婚する傾向にあった。アメリカでは宗教的特権よりも経済的特権がより価値のあるものであった。[17]

全体的に見て，アメリカでの結婚は，祖国の時と比べれば柔軟なものになり，より世俗的になり，娘たちは恋愛をベースにした結婚をできるようになった。しかし，祖国にいた時に彼女たちが夢見た「金持ちでも貧しい娘と結婚する」という夢は決して簡単に叶うものではなかった。多くの娘たちが，結婚後も社会的には上昇することがなかった。その1つの理由としては，いくら自由に恋愛結婚をできるようになったからといって，所詮彼女たちの出会いは同じコミュニティの中だったことにある。彼女たちは5番街に行って相手を選べたわけではない。移民の娘たちは普通，同じ労働者階級の相手と結婚したし，その中でも特に同じ民族同士の結婚をした。また娯楽にかける金などほとんどなかったローアー・イースト・サイドの人々にとって，気軽な娯楽が提供される場所はテネメントの前のストリートや，近所の公園に友達などで集うことだった。春になると，多くの家族が夕食の後に公園に散歩に行った。ユダヤ人移民の娘たちにとって，アメリカ式の服装というのは，憧れのものであった。服をアメリカ風に変えることはアメリカ人として新しいステータスを持つ最初のステップであった。しかし，彼女たちは給料を全て母親に渡すことが普通だったので，仕事帰りにグラント通りやバワリーでのウィンドーショッピングを楽しみ，いつかそれらを買える日を夢見たのだった。傾向としては，母親の世代が，テネメント内で，友達とお茶を飲みながら，時間を過ごしたのに対して，若い世代は外で娯楽を楽しむようになった。大衆のための公共の娯楽としては非常に安価で映画を楽しめるニッケルオデオンやダンスホールなどがあった。多くの若者は，映画館や劇場でデートをしたり，ダンスホールで，楽しい時間を過ごした。しかし，やはり一番の娯楽は家族と一緒に家で過ごすことや，近所に遊びに行くというのが最も一般的な遊びであった。[18]

Bread Givers にでてくる娘たちにとっては，オーソドックスと言われた信心深いユダヤ教信者の父の下で結婚に対しても非常に過酷な試練があった。父の厳格さは上の姉たち三人が，自分たちの愛する男たちと結婚しようとした試みをことごとくつぶしていく。特に長女の Bessie に対する仕打ちはひどいものだった。Bessie はいつも休みなく働いていたため，皆彼女を「行き遅れ」だと思っていた。しかし，ある日ついに，彼女は愛する人とめぐり合い，父親に紹介する。しかし父親は，彼女が嫁に行ったら稼ぎ手がいなくなるとその結婚に反対した。そのような理不尽なことを言う父親と会い，男はBessieにそのような父親は捨てて，自分と一緒になるよう促すが，彼女は "I couldn't marry a man that don't respect my father." [19] と言う。結局その男はすぐに Bessie の元を去り，すぐに別の女性と婚約した。彼女はその後，父親の連れてきた近所に住む知り合いの６人の子持ち寡婦の魚行商人と結婚することになったのだ。

三人の姉の結婚がことごとく父親によって辛い現実へと変わっていく様を見てきた Sarah にとって，その家庭にいながらにして自らの意志で幸せになることはほぼ不可能だと感じられた。彼女は父のそばを離れる決意をする。つまり，家をでる決心をするのだった。以下は，女は男に仕えてこそ天国に行けるのであって，この父の下を離れるべきではないと Sarah を罵倒する父親に対して彼女が言い放った言葉である。

> I've got to live my own life. It's enough that Mother and the others lived for you....I'm not living in olden times. Thank God, I'm living in America! You made the lives of the other children! I'm going to make my own life! ...Nobody can stop me. I'm not from the old country. I'm American!"[20]

この言葉にも，自分の家庭を逃げ出しさえすれば，アメリカ人になることができて，新しい生活ができると考えていた当時の若者の考えがよく現れている。祖国と違って，結婚相手を自由に選ぶことのできるアメリカという縮図がよく見える言葉である。

3. ユダヤ移民の妻たち

Bread Givers の中の母親も，伝統的ユダヤ人家庭の例に漏れない母親であった。一般にユダヤ人女性は幼い頃から女の美徳は宗教の勉強をする男のために働き，仕えることだと教えられてきた。ユダヤ教の考えによれば，神は女性の祈りは聞かないが，そこにも例外があり，神に祈る男に仕える女性だけは神が祈りを聞き入れ，天国に行くことができた。[21] 実際に，ユダヤ人の家庭ではその家族経済の中心が母親であったが，母親自らが外の工場などに働きに出ることは少なかった。なぜなら家族全員が常に健康を保つ程度の清潔を保つためには，家族の中で母親が家庭に残って家族の世話や家事をすることが不可欠だったのである。食事の準備とはいえ，冷蔵庫など，食物を保存する方法は，当時の家庭にはなかったため，そのたびに一から料理を作らなければならなかった。当時のアメリカにはもう既に電気は導入されていたが，贅沢なものだったので，多くの人がケロセンランプや石炭を使った。移民にとって，贅沢などする余裕はなく，母親が経済面でも，精神面でも常に家庭の中心となって，家計をやりくりしていた。しかし，祖国のよう

に自分で家畜や作物を育て多少の家計を助けていた行為はアメリカでは現実感のない話だった。食物は全て，金と交換でしか手に入らなくなった。それは，当時の女性たちにとって，祖国とは大きく異なる違いだった。家事は非常に大変なものだったが，多くの妻たちが少しでも，家をきれいに保とうと様々な努力をした。子育てもまた，母親の責任であった。ユダヤ人家族の平均的子供の数は5人だったため，母親が家にいて子供たちの世話をするのは必要不可欠であった。[22]

また，多くの妻たちが家庭内に下宿人を住まわせることで小銭を稼いだ。彼女自身がとっていた下宿人からの稼ぎを一手にまとめ，そこから，やりくりしていたのであった。Elizabeth Ewen は，この家族経済を以下のように表現している。「父は家計を助けるために外で働く。母は全ての背骨である。」[23] 家事と両立できる収入源として母親たちの多くが下宿人を抱えることで小銭を稼いでいた。それでなくても，ユダヤ人移民たちの住む部屋は混雑したテネメントの中の1つのアパートなのに，彼女たちはできる限りの工夫をして，主に同じ国や地方出身の独身男性や女性，時として，夫と同じ職場の人間を下宿人としてとり，食事や身の回りの世話を引き受ける代わりに，賃金をもらった。1911年のニューヨーク市では既婚の東欧ユダヤ人妻の56%が下宿人を取っていた。下宿人を取ることで，平均で家計の10%の収入を得ることができた。[24] しかし，この行動の犠牲は大きかった。なぜなら，下宿人によって，経済的安定は多少もたらされたかもしれないが，家族のプライバシーはまた一つ，遠ざかった。家庭の中に常に他人がいるのである。食事の時にも，寝る時にも，例えそれが，親戚だったとしても，常に他人が家の中にいるのは，家族の関係を複雑なものにしただろう。しかし，だからといって，下宿人がいなければ，家族を養っていくためだけの金がないとき，家族の愛だけで，生きていけるのだろうか。そうとは思えない。母親たちは，下宿人をとる犠牲はよくわかっていたが，その反面，下宿人からの収入なしに，家族経済がやっていけないのもわかっていた。ぎりぎりの生活の中で選択肢はなかったに違いない。

女性たちのコミュニティ内や親戚同士互いの助け合いも続いていた。子供の世話，部屋探しや，病気の時の看病など手の空いている者が助け合い，食料が足りない時には，近所にもらいに行ったりした。女性は家庭にこもる時間が長いので，新しい社会から孤立して，アメリカへ適応するのも男たちや子供たちより時間がかかったのではないかという予想とは裏腹に，このコミュニティ内の助け合いも手伝ってか，女性の方が男性よりも新しい社会に適応する速度がずっと速かった。その理由として，彼女たちの日常生活のペースがそんなに急激に変わらなかったという点がある。祖国にいるときもアメリカに来ても，女性たちのすることは，家庭に残って家族のための仕事をすることだった。家畜が飼えないなど，多少の変化はあったといえ，彼女たちは自分のペースで仕事をこなすことができたし，マーケットなどでは祖国と同じ言葉が使われていたことから，言葉の不自由さもなかった。さらに，Irving Howe は，もともと，宗教的儀式を家庭で行っていた女性にとって，シナゴーグが大きな意味を持っていた男性よりずっと楽な宗教的転換ができたのではないかと予想している。[25]

Bread Givers の中の母親は基本的に，夫へ服従することを常としてきたため，表立って夫の意見に反対したりすることはなかったが，それでもやはり，娘たちの幸福を心から祈っていたのがわかる場面がある。Sarah が一人暮らしを始めて間もないある寒い夜，突然母が暖かい毛布とニシンの酢漬けを持ってやってくる。父親が外出している間に秘かにやってきたのだった。自

分が逃げ出した時，決して賛成をしなかった母だが，反対も決してしていなかった。母親としては，自分が常に我慢してきたもの，そして，上の娘3人の人生を潰してしまった生活からSarahが逃げて，新しい人生を始めることを嬉しく思ったに違いない。しかし，妻としては，厳格な夫の前では，手放しでそのような娘を祝福することはできなかったのであろう。母親の行動に感謝し，どう恩返しをすればいいかを問うSarahに対し，母親は“Only come to see me soon.”[26]とだけ言う。この母親は，物語の最後で，自分が死にゆく時に，Sarahが教師となったことを誇りに思っていること，そして，父親の面倒をしっかりと見てくれるようにさえ，頼んだのであった。なぜ母は父親より，子供たちのアメリカ化に対して柔軟だったのかという理由は様々なものがあるが，母親の方が，それまでの人生の中で我慢することの辛さや自分を素直に表現できないことの苦しさを知っていたのではないだろうか。男性は概して祖国で，好きなことをしてきた。宗教の勉強をする際も，何不自由なく勉強に専念することができたし，家庭のことは結婚前には母に，結婚後は妻にまかせっきりなので心配することはなかった。一方，女は，生まれてからずっと，男よりも苦労の多い人生だった。教育をもっと受けたいと思っても断念して，家事を手伝い，結婚さえ，自分の意思とは反して親の意向で決められることもあった。その様な彼女たちにとって，アメリカ化する子供と自分の夫を見て，自分の影を映したのではないか。妻たちは，自分が我慢することの大変さ，そして，夫に従う苦労をわかっていたからこそ，子供たちの気持ちが父親以上にわかったのだと思う。

4. アメリカ社会の中で一人の人間として

Sarahはその後，努力の末ついに大学に入学できた時に，ユダヤ人である自分とアメリカ人になりたい自分の間で自己喪失の危機に陥った。彼女は，大学に入学できたことを非常に嬉しく思い，これでついに自分も長年の夢であった「アメリカ人」になることができると思った。学期の初めに学校主催のダンスパーティーがあった。ダンスパーティーはアメリカ人であることの証であったから，彼女は非常にそれを楽しみにしていた。しかし，そのダンスパーティーの真っ只中で，彼女は過去から逃げられないという過酷な現実に気づくのである。確かに，彼女はパーティーに参加することができた。しかし，誰も彼女をダンスに誘わずに，彼女は広い会場の中で孤立していた。みんなは，美しい服に身を包み楽しんでいた。彼女は心の中で泣き叫ぶのであった。“Even in college I had not escaped from ghetto. Here loneliness hounded me even worse than in Hester Street. Was there no escape? Will I never lift myself to be a person among people?”[27] Sarahは自分が自分のことをアメリカ人だと思っても，他人は自分ことをユダヤ人だと認識するという事実に気づいたのであった。

伝統的で厳格な家庭から逃れても本当の意味でアメリカ人になれないとわかった若いユダヤ人たちは，その事実と自分の過去を受け入れようとした。Sarahは公立学校の教師となり，校長と結婚をした。そして父親の体調が悪くなり，彼女の助けが必要になった時に，彼女は父親と共に暮らすことにした。彼女は自分の過去をみつめ，それを受け入れることなしには，過去の惨めさから抜け出せないことに気づいたのであった。若い時，家を飛び出した時には過去を捨てて，完全なるアメリカ人になれると信じていた。しかしそれは違った。老後の父を目の前にして，彼

女は過去を理解することと，父親を理解すること，そしてなによりも，その過去と自分の父親を受け入れなければ，本当に前に進むことはできないと言う事実に気づいたのだった。Anzia Yezierska は自伝 *Red Ribbon on a White Horse* の中でこう語っている。

> I had to break away from my mother's cursing and my father's preaching to live my life; but without them I had no life. When you deny your parents, you deny the ground under your feet, the sky over your head. You become an outlaw, a pariah.[28]

親を否定することは自分の全てを否定することになる。Sarah，あるいは，Anzia自身はそれに気づいたのである。

おわりに

ユダヤ人たちはアメリカという新天地を夢見て，祖国での迫害を逃れて，新しい希望を胸に抱き，長旅を終える頃，船の上から自由の女神を見た。それぞれが，それぞれの明るい未来を夢見ていた。しかし，新しい環境で彼らを待っていたのは，決して明るい未来だけではなかった。これまでに見てきたように，特に女性たちはそれぞれの立場で，それぞれの苦悩があった。妻は第一に夫に仕える者として家庭を支えた。しかし，同時に子供たちの母親として，娘たちを愛した。娘たちはアメリカ人になりたいと強く願った。アメリカ風の服に身を包み，アメリカ的な遊びを夢見た。自分を取り囲む環境が古臭く感じ，結婚を通して，さらには，自分の力で外の世界へ飛び込もうと試みた。しかし，アメリカという社会に出たからといって，無条件に彼らをアメリカ人として受け入れるほど，現実は甘いものではなかった。現実と理想との間で，さらには，過去から受け継がれた伝統と自分が信じる未来との間でユダヤ人女性たちは悩み，傷つき，それでも，しっかりと自分を見つめ，アメリカ社会の中で生きていたのではないだろうか。

＊この論文は2003年６月ニューヨーク州立大学にて修士論文として提出し，2004年５月白百合女子大学アメリカ文化・文学コロキアムにて口頭発表した原稿から抜粋・加筆したものである。

注

1．ユダヤ教のモーセの律法に対して，まだ成文化せず十数世紀に渡って口伝された習慣律をラビたちが集大成したもの。
2．雇用者が労働者に材料を提供し，労働者はそれを自分たちの家や小さな仕事場で製品へと仕上げ，仕上がった分だけ賃金を支払われるという搾取労働の仕組み。衣服産業などでは，高価な機械を雇用主が用意する必要がないという利点から，このシステムが多く採用されていた。労働者の多くは女性，子供であり，低賃金・長時間にわたる労働・不衛生で安全面に問題ある労働状況などの側面があった。
3．Steven J. Rubin (ed.) *Writing Our Lives.* xv-xvi.
4．Randy D. McBee, *Dance Hall Days.* p16.
5．Moses Rischin, *The Promised City.* p9.
6．Ruth Rosen, *The Lost Sisterhood.* p41 and p111.
7．ロウアー・イースト・サイドのテナメントに関する詳しい記述に関しては以下を参照。Malcolm

Bradbury and Howard Temperley (eds.) *Introduction to American Studies.* p186, Stephanie Coontz, *The Social Origins of Private Life.* p296, Elizabeth Ewen, *Immigrant Women in the Land of Dollars.* p27, Timothy J. Gilfoyle, *City of Eros.* p53,and p200, Henry Goodman (ed.) *The New Country.* p28 and p50, Irving Howe, *World of Our Fathers.* pp142-151, McBee, *Dance Hall Days.* p17, Steven Mintz and Susan Kellogg, *Domestic Revolutions.* p85, Joan Morrison and Charlotte Fox Zabusky, *American Mosaic.* p9, and Sydney Stahl Weinberg, *The World of Our Mothers.* p91.

8. Anzia Yezierska, *Bread Givers.* p1.
9. 当時のユダヤ人街で中心を走った通り。道の脇には手押し車が並び，夕方になると夕食の買い物をする女たちでごったがえした。
10. Yezierska, *Bread Givers.* p22.
11. Ibid. p29.
12. Mintz, *Domestic Revolutions.* p88.
13. John Bodnar, *Transplanted.* p82.
14. Ewen, *Immigrant Women in the Land of Dollars.* p99.
15. Ibid. p25.
16. Bradbury and Temperley (eds.) *Introduction to American Studies.* p145.
17. Carl N. Degler, *At Odds.* p133.
18. Howe, *World of Our Fathers.* p209.
19. Yezierska, *Bread Givers.* p51.
20. Ibid. p138.
21. Ibid. p9.
22. Ewen, *Immigrant Women in the Land of Dollars.* P133.
23. Ibid. p109.
24. Weinberg, *The World of Our Mothers.* p135.
25. Howe, *World of Our Fathers.* p173. 祖国では宗教的儀式の中心はシナゴーグであったが，アメリカではシナゴーグは宗教的儀式よりも，コミュニティ内の集会所的な様相を深めていた。そのため，多くのオーソドックスユダヤ人たちは，神聖な神との対話の場を失い苦労した。
26. Yezierska, *Bread Givers.* p170.
27. Ibid. P220.
28. Yezierska, *Red Ribbon on a White Horse.* P72.

参考文献

* Bodnar, John. *The Transplanted: A History of Immigrants in Urban America.* Bloomington. ID: Indiana University Press, 1985.
* Bradbury, Malcolm and Howard Temperley (eds.). *Introduction to American Studies. 3rd ed.* Essex, UK: Longman, 1998.
* Coontz, Stephanie. *The Social Origins of Private Life: A History of American Families 1600-1900.* New York, NY: Verso, 1988.
* Degler, Carl N. *At Odds: Women and the Family in America from the Revolution to the Present.* New York, NY: Oxford University Press, 1980.
* Ewen, Elizabeth. *Immigrant Women in the Land of Dollars: Life and Culture on the Lower East Side 1890-1925.* New York, NY: Monthly Review Press, 1985.
* Gilfoyle, Timothy J. *City of Eros: New York City, Prostitution, and the Commercialization of Sex, 1790-1920.* New York, NY: W. W. Norton & Company, 1992.
* Goodman, Henry (ed.) *The New Country: Stories from the Yiddish About Life in America.* Syracuse, NY: Syracuse University Press, 2001.

* Howe, Irving. *World of Our Fathers: The Journey of the East European Jews to America and the Life they Found and Made There.* New York, NY: Harcourt Brace Jovanovich, 1976.
* McBee, Randy D. *Dance Hall Days: Intimacy and Leisure among Working-Class Immigrants in the United States.* New York, NY: New York University Press, 2000.
* Mintz, Steven and Susan Kellogg. *Domestic Revolutions: A Social History of American Family Life.* New York, NY: The Free Press, 1988.
* Morrison, Joan and Charlotte Fox Zabusky. *American Mosaic: The Immigrant Experience in the Words of Those Who Lived It.* New York, NY: E. P. Dutton, 1980.
* Rischin, Moses. *The Promised City: New York's Jews, 1870-1914. 3rd ed.* Cambridge, MA: Harvard University Press, 1977.
* Rosen, Ruth. *The Lost Sisterhood: Prostitution in America, 1900-1918.* Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 1982.
* Rubin, Steven J. (ed.) *Writing Our Lives: Autobiographies of American Jews, 1890-1990.* Philadelphia, Penn: The Jewish Publication Society, 1991.
* Weinberg, Sydney Stahl. *The World of our Mothers: the Lives of Jewish Immigrant Women.* Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 1988.
* Yezierska, Anzia. *Bread Givers: A novel: A struggle between a father of the Old World and a daughter of the New. Revised ed.* New York, NY: Persea Books, Inc., 1999.
* ---. *Red Ribbon on a White Horse. Revised ed.* New York, NY: Persia Books, 1987.